

三河方言の文末形式の記述的研究 — 2 —

又 平 恵 美 子

キーワード：三河方言、文末形式、イントネーションの型、終助詞「よ」、

ノダ文、聞き手めあて性、禁止表現、質問、疑問、自問

要 旨

本稿は三河地方の現代の方言の文末形式について、記述的研究をおこなう。本稿でとりあげたものは、

・「に」

・「ん」…「かん」「だかん」「だん」

・「やあ」…「やあ」、「かやあ」「だかやあ」「だやあ」、「さやあ」

である。これらについて意味・機能、聞き手めあて性の高低、形態、用法について、疑似標準語と対照しながら検討する。

1. はじめに

又平(1997)では、三河方言の文末形式のうち、「-in」「まい」「(だ)ら」「じゃん類」をとりあげたが、本稿は文末形式「に」「ん」「やあ」およびこれらの形式と他の形式が複合した形態を持つ形式について、疑似標準語と対照しながら考察する（以下、対照する疑似標準語はカタカナで表記する）。本稿で扱う文末形式は、男女差・世代差のないものであり、品詞でいえば終助詞に該当するものであると思われる^{*1)}。

なお本稿での用語・用法で、又平(1997)と重複するものに関しては一部説明を省略しているものもあるため、あわせて参照されたい^{*2)}。

2. 「に」

文末の「に」にはイントネーション「J」を伴い、疑似標準語でいえば「ヨ」に相当するタイプがある^{*3)}。

(1) 「ぐずぐずしとると次の電車も行っちゃうにJ」

(2) 「いまお風呂に入ると、まだ熱いにJ」

(3) 「俺の父さん、警察に表彰されたことあるだに」

三河方言でもこれらすべての「に」を「よ」でいうことがある。しかし「よ」が用いられる場合すべてが「に」でいえるわけではない。「に」は「ヨ」と同様、前接する内容が確言の形式であるときも用いられるが、概言の形式でも、証拠のある推定「らしい」「ようだ」「みたいだ」「はずだ」、可能性「かもしれない」、直感的確信「にちがいない」、様態「そうだ」、伝聞「そうだ、という、とのことだ」等にも用いられる^{*4)}。したがって「に」が用いられない場合の制約は、情報の確からしさと別次元にあることになる。

まず「に」は独り言では用いられず、「ヨ」よりも聞き手めあて性が高いといえる。

(4) 「まったく、他人のことなんかほっといてほしい [よ↘/*に]」

また(5)のように相手から聞いた情報をもとに、それを肯定・是認する発話内容には「に」が用いられにくく、(1)(2)(3)のような「聞き手が知らないと目される話し手の知識情報」を提供する場合に用いられる。

(5) 「やっぱりあんたの言っとったとおりだった [よ↘/?に]」

それから、前接する形式の形態によって「に」の使用の制限がある。たとえば働きかけを表す場合「よ」「に」の使い分けは以下のような分布になる。

(6) 「傘を持っていけ [よ↗or↘/*に]」

(7) 「そんな格好で寝るな [よ↗or↘/*に]」

(8) 「もうやめよう [よ↘/*に]」

(9) 「このこと、誰にも言わんで [よ↗/*に]」

(10) 「車に気を付けて帰ってちょうだい [よ↗/*に]」

(11) 「車に気を付けて帰りん [よ↗/?に]」

(12) 「やい、しっかりせんといかん [よ↗or↘に↗]」

(6)(7)のような命令形や禁止の命令「ナ」、(8)の勧誘「～(ヨ)ウ」、(9)(10)の依頼の「～て」形、「ちょうだい」や「ください」には用いられることはない。(11)の「-in」の命令形にも用いにくい。したがって「に」は終止形に接続できるものであるということになる。

(12)のように「シナイトイケナイ」の意味の「せんといかん」の義務・当為表現の場合「に」が用いられる。つまり「(ある条件が為されないことは)いけない」と話し手が<価値判断>をくだし、それが聞き手の義務・当為であることを表し、間接的に聞き手の行動

を促そうとするときには「に」を用いることができる⁴⁵⁾。

これと同様に、話し手が「いかん」とく価値判断>を述べることで、間接的に聞き手の今後の行動を抑止することを表現する場合も「に」が用いられる。

(13) 「いいか、柵の中に入ったらいかん [よJ/にJ]」

(14) 「こら、柵の中に入ったらいかん [よJ/*にJ]」

(13) (14) はいずれも「イケナイヨ」の意味であるが、既にやってしまったことについての制止の(14)は「に」が用いられない⁴⁶⁾。

井上(1997)では、

[子供の写真を撮ろうとして]「動くな↑(上昇)」(抑止)

[子供が動いた]「動くな↓(非上昇)」(制止)

であることから、同じ禁止表現でも発話されるタイミングによって、つまりそれが「抑止」であるか「制止」であるかでイントネーションが異なること、また井上(1993)では、これと同様なことが、富山方言では異なる終助詞で表現されるということを指摘している。

三河方言では禁止表現のうち、話し手の<価値判断>が加わる場合に限って、発話されるタイミングにより終助詞が異なる。

この他「よ」と「に」の違いをあげると、話し手の生理的な快不快の訴えには「ヨJ」が用いにくいのと同様に「に」も用いられにくい。

(15) 「おなかがすいた [よJor ようJ/*にJ]」

(16) 「腰が痛い [よJor ようJ/*にJ]」

また、たとえば質問に対する回答はできるが、質問の相手の意図がわからず「なぜそんな質問をするのか」と訝る気持ちを含んだ「ヨJ」(「ケドJ」)があるが、このような効果を「に」で表すことはできないようである。

(17) 「3に5を足すといくつになると思う？」

「8だ [よJ/けどJ/??にJ]」

(18) 「あんた昨日学校行った？」

「行った [よJ/けどJ/??にJ]」

以上の観察より「に」が用いられない「ヨ」の接続について、用法別の対照表を掲げる。
なお表の中の「に」の*の部分は疑似標準語と同じ表現が用いられる。

(表 1)

			「ヨ」	「に」
情報提供			ヨ」	に」
独り言			ヨ」	*
相手情報の肯定・是認			ヨ」	??
働 き か け	形 式	命令形	シロヨ」・」	*
		禁止「ナ」形	スルナヨ」・」	*
		勧誘「ウ」形	シヨウヨ」	*
		依頼「テ」形	シテヨ」・」	*
	価値判断に よる間接的 表現	当為義務	イケナイヨ」・」	いかにに」
		抑止	イケナイヨ」	いかにに」
		制止	イケナイヨ」	*
生理的快不快の訴え			ヨ」・ヨウ」	*
質問の意図への訝り			ヨ」・ケド」	??

「に」は、形態は終止形に接続し、聞き手めあて性が高く、用法は「聞き手が知らないと目される情報」を提供する場合と、「義務・当為、制止」の場合であるといえる。この間接的な働きかけである「義務・当為、制止」も、直接的な意味では「聞き手が知らないと目される情報」を提供しているといえる。

3. 「ん」

文末形式「ん」は必ず「だん」「だかん」「かん」の形で実現し、いずれも疑似標準語の「カイ・カネ」「ダイ・ダネ」などの「イ」「ネ」の部分に相当する。聞き手めあて性が高く、独り言には用いにくい。

3.1. 「だかん」「かん」「だん」

「だかん」は「ノカイ」、「かん」は「カイ」に相当し、疑問語のない場合にも用いられ、質問するときや、相槌をうつとき、また前接する形態によっては命令、申し出、勧誘などに用いられる。聞き手めあて性は高い^{*7)}。

(19) 「独り暮らし、やめたよ」

「へえ、そうかんじゃあ今は名古屋まで通つとるだかん」

(20) 「何をぐずぐずしとる。早く行かんかん」

(21) 「手伝ってあげらあかん」(アゲヨウカネ)

(22) 「肩でも揉もうかん」

(23) 「あんたもいっしょに飲まんかん」

「だん」は「ノダイ」「ノダネ」にほぼ相当するが

(24) 「僕モ行クンダイ！」

のように主張する場合には「だん」は用いられず、通常「だん」は疑問語とともに用いる^{*8)}。「だん」は反語的表現にも用いられる。

(25) 「何をたわけたこといっとるだん」

質問の場合「だん」と疑問語と結びついた「だかん」との意味の差はない。

(26) 「何を持って来ただ(か)ん」or「

「かん」と「だかん」の違いは「カイ」と「ノカイ」の違いと同じである。

(21) (22) (23) のように「(よ)う」「～せん(シナイ)」などの申し出や勧誘には「だ(か)ん」「ノカイ」のようなノダ文は接続しない。

また「カイ」と「ノカイ」が発話される状況によって、いずれも使用できる場合があるように「かん」と「だかん」も同様に使用できるものがある。厳密な意味では、含みとしては異なるため、全く同じ発話内容を伝えるものではないが、(27)のように質問によって知りたい内容が疑問語部分で示されている場合と、(28)のように話し手自身が「じゃないか」と疑念を持って推量したことについてその妥当性を問うときには「かん」「だかん」のいずれも用いることができる。

(27) 「うちの弟はどこへ行つただ(か)ん／かん」

(28) 「あの猫は寿命で死んだじゃない(だ)かん」

4. 「やあ」

「やあ」は単独での用法と、他の文末形式が複合する形式との用法では、聞き手めあて性の高低が異なる。

4.1. 「やあ」

疑似標準語の詠嘆的な「ナア」のうち、三河方言では、「やあ \cap 」になるものがある。独り言でも用いられ、問いかけにも用いられないため、聞き手めあて性は低い。詠嘆的な「やあ」が「ノダ」文である場合、「ノダナア」の意味で「だやあ」になる。なお「ダロウナア」にあたる形式は「だらあやあ」にはならず、「だらあなあ」である。(33)(34)のように推量して表現する場合は「やあ」ではなく「なあ」になり、「やあ」は話し手が対象と直面しているときに用いられるようである⁹⁾。

(29) 「あの車、中古なのによ \cap 走るやあ \cap 」

(30) 「困ったやあ \cap お金が足りんかもしれんやあ \cap 」

(31) 「いい天気だやあ \cap 、海がきれいだやあ \cap 」

(32) 「お金って、あるところにはあるだやあ \cap 」

(33) 「来月の今頃は、もっと暑くなるとるだらあなあ \cap 」

(34) 「あれから6年なら、あの子も4月からはもう小学生になるだなあ \cap 」

4.2. 「かやあ」「だかやあ」「だやあ」

「かやあ」は疑問語がない場合にも用いられ、「カナア・カシラ」の意味にあたる。独り言にも用いられ、聞き手めあて性は高くない。(35)のように「ーない」に接続するときは待ち望み、(36)のように「ー(よ)う」に接続するときは逡巡、それ以外は(37)のように自問的な疑問や疑念をあらわす。この(37)のような場合、聞き手がその答えを知っていると目されるときには、間接的に質問になることがある。

(35) 「早くお正月が来ないかやあ \cap 」

(36) 「眠いで、もう寝ようかやあ \cap 」

(37) 「ガスの元栓閉めたかやあ \cap 」

「だかやあ」は疑念を表す。疑似標準語と対応させてみると「ノカナア・ノカシラ」に相当するようであり、これも疑問語がないときにも用いられる。

「だやあ」は疑問語のある場合に限って、「ノカナア・ノカシラ」あるいは「ノダロウ」「ダロウ」など、疑念の意味で用いられる。語形を対照させると、疑似標準語では「*誰

ダナア」「*イツダナア」ということはないが、「誰だやあ」「いつだやあ」が「誰ダロウ」「イツダロウ」という意味で用いられる。「だやあ」も独り言に用いることもあり、聞き手めあて性は高くない。また疑問語と結びついた場合、「だかやあ」と「だやあ」の意味の差はない。

(38) 「あのおじさん、どこへ行くだ(か)やあ」

「かやあ」と「だ(か)やあ」の違いは「カナア・カシラ」と「ノカナア・ノカシラ」の違いと同じである。(35)(36)の待ち望みの「ない」と「(よ)う」には「だ(か)やあ」「ノカナア・ノカシラ」などノダ文が接続しない。

また「カナア・カシラ」と「ノカナア・ノカシラ」が発話される状況によって、いずれも使用できる場合があるように「かやあ」と「だ(か)やあ」も同様に使用できるものがある。

話し手の記憶を確かめている場合と、話し手自身が「じゃないか」と推量した内容の妥当性を自問するときには「かやあ」「だ(か)やあ」のいずれも用いることができる。

(39) 「ガスの元栓閉めた(だ)かやあ」

(40) 「次の粗大ゴミの日は、いつ[だ(か)やあ/かやあ」

(41) 「あの猫は保健所につれてかれたじゃない(だ)かやあ」

4.3. 「さやあ」

「さやあ」は否定的見解に寄って疑念を打ち明ける相手に、それを強く打ち消すような場合や、相手の質問に対してその応答が「いうまでもなく当然である」というときに用いられる。独り言では用いられず、聞き手めあて性は高い。このため「さやあ」をわざわざ「さ」＋「やあ」の形式が複合した形態である、と考えて意味を対応させようとする矛盾が生じる。終助詞の複合形を再分解して分析する研究方法もあるが、この場合は、形態上同じ形式を持っても、複合した段階で別の単語になり、異なる意味を持つと考えた方がよいと思われる。

前接する内容は確言、あるいは直感的確信「にちがいない」「にきまっている」など、その根拠が話し手自らが判断した確かさに由来しているもので表される。疑似標準語でいえば、「サア」に近いようである。なお疑似標準語と同じく、ノダ文にあたる「だ」には後接しない。終止形接続である。

(42) 「明日までに間に合うかやあ」

「間に合うさやあ」

(43) 「来年人類は滅亡するだら？」

「そんなことないにきまつとるさやあ」

(44) 「あんたもあの映画見た？」

「見たさやあ」

5. まとめ

本稿でとりあげた三河方言の文末形式について、以下のように表にまとめられる。

「ん」類は必ず疑問語または「か」とともに用いられ、疑問を表すことがある。「やあ」類も疑問語または「か」とともに用いられた場合疑問を表すことがある。

疑問をあらわす文末形式でも「ん」類は聞き手めあて性が高いため、自動的に相手への質問になるのに対し、「やあ」類は聞き手めあて性が低くないので、間接的に質問になることはあっても文型上の義務ではない。

(表 2)

		疑似標準語	聞き手めあて性	用法または意味	接続形態	イントネーション
に		ヨ	高	聞き手の知らない情報を提供する		」
ん	かん	カイ	高	勧誘 a、申し出 b、質問、相槌	aない、bよう-	」 ・ 」
	だかん	ノカイ	高	質問、相槌		
	だん	ノカイ	高	疑問語の質問、反語		
やあ	やあ	ナア	低	発話時現場の詠嘆		〇
	かやあ	カナア	低	待ち望み a、逡巡 b、疑念・自問	aない、bよう-	
	だかやあ	ノカナア	低	疑問・自問		
	だやあ	ノカナア/ダナア	低	疑問語の疑念・自問/ノダ+やあ		
	さやあ	サア	高	相手の疑念の打ち消し・当然	「だ」接不可	

本稿でとりあげた表 2 内の文末形式は全て、又平(1997)でとりあげた「-in」「まい」「だら・ら」「じゃん」のいずれにも接続しない。つまり「に」「ん」類「やあ」類は、「-in」「まい」のように働きかけの意味を持つものとも、「だら・ら」「じゃん」のように共有認識を形成することを目的とする確認要求に用いられるものとも、接続できるような意味を持っていない。この点で終助詞「ヨ」「ネ」とは異なっている。

注

- *1) 又平(1997)でとりあげた文末形式も、活用しないという点、特に「ら」「じゃん」は、従属節に存在しないということから助動詞的な要素は低いが、これらを終助詞と認定するだけの要素もないため、単に文末形式とする。
- *2) 本稿での矢印記号は、その記号が付される直前のイントネーションの型をあらわし、「J」…上昇、「V」…下降、「N」…上昇し下降する、であることを示す。
- *3) 文末の「に」は他に、過去形に接続し、イントネーションが必ず「V」になり反実仮想をあらわすタイプがあるが、これは疑似標準語と全く同じであるため説明を省略する。
・「連絡してくれれば迎えに行つたにV」(ノニ)
・「メット被つとつたら死ななかつたらあにV」
- *4) 確言・概言の分類は益岡・田窪(1992)を参考にした。なお概言の断定保留「ダロウ」「マイ」は、三河方言は意味・用法が異なるためか、「に」は接続しない。
- *5) この他「せんといかん」(シナイトイケナイ)、「せにやいかんに」(セネバイケナイヨ)「だめだ」「(ほう)がいい」も同様である。また当為表現の「べきだ」「ものだ」「ことだ」も「に」が接続できる。
- *6) たとえば、既にやってしまったことについての非難でも、
・「わあ、先生に言つてやろ、柵の中に入つたらいかんだ[よJ/にJ]」
のような場合、それが禁止事項であることを言い含めて教える「イケナイングヨ」に相当し、発話の目的が「制止」にはあたらないので「に」を用いることができる。
- *7) 「カネ」「ノカネ」とも近いが、
・「デハ年寄りハ退散スルトスルカネ」
のような問かけ性の低いものには「かん」が用いられない。
- *8) なお、「だん」を「じゃん」と混用する人もいる。
・「私も行つてきただんねえN」(=じゃんねえN)
・「ここにあるだんJorVorN」(=じゃんJorVorN)
- *9) ただし過去の出来事がまざまざと思い出されるときなどには過去形と結びついて「やあ」が用いられることもある。
・「あの時食べたおにぎり、ほんとにおいしかったやあ」
また他から得たばかりの情報で、まだ実感が伴っていないものには「やあ」が用いにくい。
・「ふーん、じゃあジェット燃料が一番高級な油を使うだなあ」

参考文献

- 井上 優(1993)「発話における『タイミング考慮』と『矛盾考慮』—命令文と依頼文を例に一」『研究報告集4』国立国語研究所
- 井上 優(1997)「禁止表現」『日本語学キーワード事典』朝倉書店
- 上原 聡(1997)「三河方言に残る連体形準体法—標準語の「の」に相当するもの—」『国語学会平成9年度秋季大会要旨』
- 金水 敏(1994)「終助詞ヨ・ネ」『言語』Vol. 22 No. 4
- 野田春美(1997)『の(だ)の機能』くろしお出版
- 橋本 修(1992)「終助詞複合形の意味分析」『国語学会平成4年度春季大会要旨』
- 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語—改訂版—』くろしお出版
- 又平恵美子(1997)「三河方言の文末形式の記述的研究—1—」『筑波日本語研究』2

(1998年8月25日 受理)